



教育開発推進機構 NEWSLETTER

教育開発ニュース

KOKUGAKUIN University 平成29年(2017)2月1日

VOL. 15
NEWSLETTER

目次

- 先生になりたい人集まれ!! —教職センターってこんなところ—p.2
- みんなの学びをサポート! p.4
—困ったことがあれば、いつでも学修支援センターへ—
- [特集] 國學院大學における「理想」の授業とは? p.8
井上明芳 (文学部准教授)・中川孝博 (法学部教授)・金子良太 (経済学部教授)
遠藤潤 (神道文化学部准教授)・吉永安里 (人間開発学部助教)・中山郁 (教育開発推進機構准教授)
(司会) 戸村 理 (教育開発推進機構助教)
- シリーズ「大学授業最前線—教員の努力! 学生のまなざし! (15) —」 p.15
小手川正二郎 (文学部准教授)
- 名著探訪 —高等教育、この1冊 (第7回)— p.18
- 教育開発推進機構彙報 p.19
- そったくどうじ 啐啄同時 —編集後記— p.20

もっと日本を。もっと世界へ。



國學院大學



先生になりたい人 集まれ!!

—教職センターってこんなところ—



教育開発推進機構
教職センター長

柴崎 和夫

教職センターは、國學院大學における教職免許取得に関わるすべての事柄の中心となる組織です。教職免許取得に必要な実際の授業に関しては、教職課程の先生方を中心に運営されています。けれど、大学としての教育免許取得に関わるカリキュラム策定と運用、そして教員を目指す学生の支援、教員になった院友教員との連携等々は、渋谷、たまを問わず教職センターの仕事です。教職センターは今年度後期（10月）から、教育開発推進機構のなかの一センターになりました。教職センターの仕事を完遂するため、これまでも教員の方々の助力を得ていましたが、今後はこれまで以上に教員と職員が協力していく必要があります。それが、今回教職センターが機構のセンターになった大事な理由の一つです。

教員を目指す学生には、教職センターはよく知られて

いる組織です。次年度以降に待ち構える各種申請事項、また厳しさを少しずつ増していく教員採用試験対策等を考えていくと、教員志望学生を抱える各学部の先生方には一層の協力をお願いすることになります。「教職の國學院」を名実共に実現していくために、教職センターはその中心業務を担う覚悟を持って仕事をしていきたいと考えています。大学の教員、職員の皆さんには、今後も遠慮無く教職センターに対して叱咤激励をお願いしたいと思います。

教職センターってこんなところ

教職センターの役割は、主として以下の二点です。第一に、教員免許状の取得に関わる単位の履修やその相談対応から、教員免許状の一括申請に至るまでのすべてのサポートを行っています。第二に、教員就職に関するきめ細やかなサポートも行っています。また教職センターでは長年学校現場で活躍され管理職を経験された本学卒業生（院友）の先生方のアドバイスを受けたり、スクールボランティア等へのサポートを受けたりすることができます。

教員免許状の取得に関する窓口

- 教職課程の履修相談
- 介護等体験事前ガイダンス、実施のサポート、事後レポート回収
- 教育実習事前ガイダンス、実施のサポート、事後のサポート
- 教員免許状一括申請

教員就職に関する窓口

- 教員就職の相談
- スクールボランティア等の斡旋・紹介
- 教育委員会による学内説明会
- 採用試験対策企画の実施・運営（ガイダンス・講習会・模試等）
- 教員求人への斡旋・紹介

学校の先生になりたい人は是非教職センターへ！！

利用学生の声



文学部 日本文学科 4年

山中 あすか

(静岡県 高校国語 合格)

私は3年の夏期講習から、教職センター主催の講習会に参加しました。同じ志をもつ仲間による刺激を受けながら、専門教科ゼミで専門力を高め、試験対策講習会で小論文や個人面接、集団討論など、時間をかけてご指導いただきました。試験本番は、これだけ練習したのだから絶対に大丈夫だと、自信をもって臨むことができました。試験対策だけでなく、教職に就く心構えも教わりました。この気持ちを忘れずに、春から教壇に立ちます。



文学部 史学科 4年

鼻輪 展亮

(神奈川県・愛知県 高校地理歴史科 合格)

教職総合ゼミナールは、3年生の前期より受講し始めました。ゼミでは、教職教養や専門教養のインプットだけでなく、小論文・模擬授業・個人面接対策などのアウトプットも行いました。先生方からのご指導を受け続けたなかで、教師としての基礎・基本だけでなく、「絶対に教師になる」という気持ちも強くなりました。苦しい時もありましたが、先生方や仲間からの励ましもあって、合格を勝ち取ることが出来たと改めて思います。



文学部 中国文学科 4年

松本 侑里香

(神奈川県 高校国語 合格)

私は、3年の夏期講習から教職総合ゼミに参加しました。周りについていけないか不安でしたが、夏期講習の前に面談を行い、勉強の方針などを教えていただき、不安が解消され、勉強に励むことができました。特に、小論文講座では自分の教育観が反映される文章にするため、毎日のように書き直し、先生方のご指導を受けました。そのため、本番では課題に落ちついて答えることができました。

教職センター企画の講座によって、教員になるための基礎を徹底的に学ぶことができました。来春からは、様々な企画で学んだことを生かして自信をもって教員生活を送りたいと考えています。

教職センター 渋谷キャンパス 3号館 3階
(3310)

開室時間…月～金曜日 10時～18時

(昼休み12:50～13:50は除く)

土曜日 9時～17時

(昼休み12:50～13:50は除く)

《連絡先》 Tel: 03-5466-0152

Fax: 03-5466-0186

《URL》 http://www.kokugakuin.ac.jp/qualification/kyoumu_center01.html

※事務取り扱い時間は行事・ガイダンスにより変更になることがあります。



みんなの学びをサポート!

— 困ったことがあれば、いつでも学修支援センターへ! —

学修支援センターってどんなところ?

学修支援センターは、國學院大學の学生のみさんの学修上の困りごとの相談に乗ったり、学修をサポートしたりするところです。平成21年10月に相談室が開室され、以下のような支援をしています。

- 履修相談
- 予復習の仕方
- 語学学修の進め方
- ノートのとり方
- レポートの書き方
- 試験勉強の計画の立て方

学修支援センターには、教員と職員がいます。主として、学修の内容、勉強の進め方については教員が、履修登録等に関しては職員が相談に乗っています。

また、学修に必要な参考書も取り揃えています。センター内で閲覧することができ、必要に応じて複写することもできます。

こんなところで学修につまずいていませんか?

- 思うように成績が伸びない
 - レポート・答案がうまく書けない
-
- 毎回出席して一生懸命聞いているのに、授業内容がうまく理解できない
 - ノートのとり方、予習や復習の仕方が分からない
 - 一生懸命答案を書いたのに思っていたよりも評価が低かった
 - 出された課題の意図がうまく理解できない
 - レポートの構成の仕方がよく分からない
 - 引用作法がわからない
 - コピペ（剽窃）と引用の違いがわからない

そんな時は学修支援センターへ!!!
個別相談のほか、学修支援講座も開催してみなさんの学びをサポートしています!



▲外部講師による研修会の様子です。

利用学生の声

文学部日本文学科 1年 清水 光さん

ろう学校では6年間手話で授業を受けてきたので、まわりがみんな聞こえる人という環境は久しぶりでした。入学当初は不安が少なからずありましたが、しっかりと要点をおさえたノートテイク支援を受けるうちに、安心して授業を受けられるようになりました。また、授業前後に担当のテイカーと打ち合わせもかねた話をするなど、テイカーのみなさんと交流する時間もとても楽しいです。興味を持った人は是非テイカーになってみてください。ノートテイクの世界や私が体験してきた聞こえない世界についてもお話できればと思います。

支援学生の声

文学部日本文学科 3年 尾崎 弘佳さん

始めた当初は専門外の授業を担当するなど、不安でした。しかしノートテイカーだけでなく、被支援者の方や授業担当の先生方等とコミュニケーションをとり、対応を考えることで、よりよいノートテイクに繋がったことが自信になりました。責任感を持ち、必要とされる仕事をできることにとてもやりがいを感じています。

文学部 日本文学科 3年 木下 万暢さん

入学後しばらくはノートテイクという学内ワークスタディの存在も知らず、情報保障を必要とする人の役に立ちたいとの思いで始めました。ノートテイクをすることでそれを必要とする人の役に立てるだけでなく、テイクのなかで情報を取捨選択しまとめる能力がついたことで、自身の授業の受け方も変わり、より深く学べるようになりました。

ボランティアステーション

平成26年10月に開室されたボランティアステーション

も、学修支援センター内にあります。こちらでは、正課の授業外の学びをサポートしています。ボランティアステーションには、学外にある本学登録団体が募集している企画のほかに、学内のさまざまな企画や、ボランティアステーションに集う学生たちが立ち上げた企画もあります。

● ボランティアフェア

AMC一階に学内のボランティアサークルや登録団体のブースを設け、活動の紹介を行いました。多くの学生が参加し、ボランティア活動の実際について、ブースをまわりながら多様なボランティアのありかたを学ぶよい機会となりました。



▲入れ替わり立ち替わり、たくさんの学生が訪れていました。

● 渋谷で体験ボランティア

ボランティアをしたことがない、でもやってみたいという人向けの企画がこちら「渋谷で体験ボランティア」。大学のすぐ近くにある日本赤十字会社会総合福祉センターのご協力で実現しました。地域の高齢者の方々とのレクリエーションや、そこで働く職員さんとの交流を通じてたくさんのことを学んで帰ってきました。



▲参加者全員での記念撮影、充実感がただよっています。

● 日本文化体験ボランティア

ボランティアステーションに集まった学生たちが、みんなアイディアを出し合い、國學院らしいボランティア

アのあり方について企画されたものです。神社を参拝する作法を学ぶことを通じて、日本文化の奥深さを知るだけでなく、海外からの旅行客にもそれを正しく伝えられるようになることを目的として行われました。



▲神社参拝の作法を学んでいます。

この企画者のうち、富澤明久さん（文・神・M1）と関優里絵さん（文・外文・B3）が渋谷区においてオリンピック・パラリンピックを盛り上げるための施策提言プレゼン大会にて「日本文化ボランティアガイドの養成講座・体験イベント」を発表し、見事に渋谷区長賞を受賞しました。現在、渋谷区との協力のもとで他の学生も巻き込んでこの企画を練り上げています。興味のある方は、是非ボランティアステーションへお越しください。一緒に、世界にこの渋谷の街や日本の伝統文化を伝える方法について考えていきましょう。

● ボランティアトーク世界を学んで、自分を知る

ボランティア系サークルの代表を務める学生四人が、これまでの活動のなかで何を学び、どう成長できたかを体験を交えつつ、ざっくばらんに話してくれました。参加した学生も、先輩たちの体験談を聞くことで実際に行動に移すための足がかりを見出すことができたようです。



▲国際系サークル「優志」、手話サークル「Sign」、「児童文化研究会」、「Study for Two」の代表らを囲んで。

● スタディツアー お米づくりワークショップ

ボランティアステーションにて紹介されている企画は、いわゆる「ボランティア」のみでなく、体験型学習もあります。今年は、新潟でお米づくり体験を通じて日本文化としての農業のありかたについて学びました。



▲刈った稲をわらで束ねています。

以上、主なものを紹介してきました。これ以外にも様々なボランティアがあります。少しでも興味があれば、是非ボランティアステーションに来てみてください。経験豊富なボランティアコーディネーターが、一緒にあなたに合ったボランティアを探す手伝いをしてくれます。



▲子どもや福祉、環境関連などたくさんのボランティアの中から自分に合ったボランティアを一緒にみつめましょう。

みなさんの来室をお待ちしております！

学修支援センター相談室・ボランティアステーション 渋谷キャンパス 3号館 3階 (3306)

開室時間… (授業期間内)

月～金曜、10:00～18:00

(12:50～13:50は昼休みのため閉室)

※授業期間外の開室日時は、ホームページにてご確認ください。

特集 國學院大學における

「理想」の 授業とは？



文学部・法学部・経済学部・神道文化学部・人間開発学部+教育開発推進機構

國學院大學では、教員が自身の授業運営・内容を客観的に振り返る機会として、年2回「学生による授業評価アンケート」を実施しています。今回、教育開発推進機構教育開発センター（以下、機構）では、そのアンケート結果を参考に、各学部の先生方に集まっていただき、先生方の授業運営における工夫について、意見交換を行う機会を設けました。ここでは「ほんの少し」ではありますが、その様子をご報告したいと思います。なお詳細とその考察は、別の機会を予定しています。

戸村：教育開発推進機構の戸村です。本日はお集まりいただきありがとうございます。ネガティブな印象を持たれがちな授業評価アンケートですが、機構ではポジティブなフィードバック・授業改善にもっと利用できたらと思っています。今回



お集まりいただいた先生方は、同アンケートの「理解度」「満足度」「授業外学修時間」のポイントが、所属されている学部で相対的に高い先生方です。近年の高等教育政策では、授業外学修時間に注目が集まっています。そこで本学では、平成27年度後期の実施分から、「この授業1回あたりの授業外学修時間（予習復習課題等）は平均何分ですか？」という設問を新たに設けました。その結果を見ると、本学の授業外学修時間の平均は27.9分でした（下図）。また「学修なし」～「30分未満」と答えた回答を合計すると、77.5%にもなりました。つまり

座談会テーマ

國學院大學における「理想」の授業とは？

日時

平成28年9月16日(金) 13:00～15:00

目的

各学部教員の授業改善取り組みについて話し合い、共有することで、本学学士課程教育のさらなる改善を目指すことを目的とする。

参加教員 ※職名は当時

文学部：井上明芳准教授

法学部：中川孝博教授

経済学部：金子良太教授

神道文化学部：遠藤潤准教授

人間開発学部：吉永安里助教

教育開発推進機構：戸村理助教、中山郁准教授、小濱歩准教授、仙北谷課長

条件

平成27年度後期学生による授業評価アンケートで、「理解度」「満足度」「授業外学修時間」が相対的に高評価の教員を各学部から1名選出

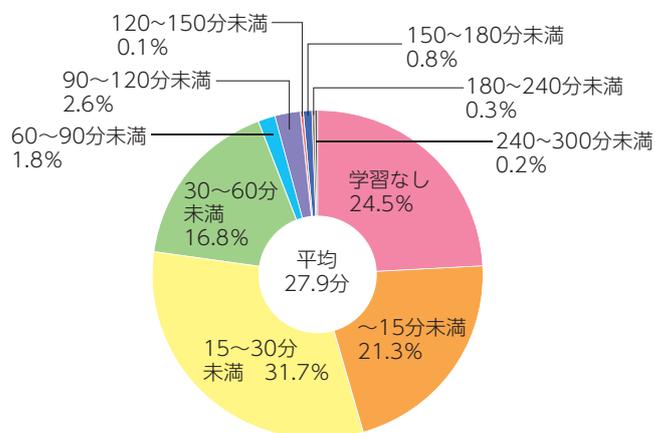


図1 この授業1回あたりの授業外学習時間の平均は何分ですか？

本学では、8割近い学生が、毎回の授業につき30分未満の予習・復習で単位を習得しているのが実態のようです。機構ではこれを「國學院大学の30分問題」と銘打っているのですが、今日お集まりいただいた先生方は、平均より多い学修時間であって、理解度と満足度も高い結果となっています。本日の意見交換会では、是非、先生方の授業運営や内容面での工夫をお聞かせいただけたらと思っています。そしてそれを共有することで、機構としては、本学の授業全体の改善に資する取り組みをデザインできたらと考えています。それでは遠藤先生から授業運営上の工夫等をお聞かせいただけますか？

遠藤：昨年から神道文化学部の教務部委員になりました。学修時間の確保や授業外学修が、全学的な課題になっているので、何かしらしておかないと示しがつかないと思い(笑)、いくつか工夫をしています。



自分が担当している神道思想史学という授業は、知識をたくさん伝達しなければならない授業です。神道文化学部の学生は、1年生時に『神道事典』という基本書を購入しているので、それを読ませた上で少しずつ何かを聞くようにしています。

ただしシラバスを読んで準備しなさいといってもなかなか準備しません。そこで僕なりに考えて授業計画を時系列にした表を配布して、2回目の授業はこういうことをやるよ、3回目までの間にこういうことをしておいてね、3回目の授業でこれこれ聞くからねというように、事前学習の流れ・順序立てをしています。

出欠確認は、コメントペーパーだと配布や整理が大変なので、1枚の紙で学生とやりとりをする形にしました(シャトルカード)。その紙に毎回、予定表で出している課題だけでなく、わからないことなども書いてもらって、学生の顔を見て返却しています。時間がかかりますが、副次的な効果が見えてきていて、欠席したときには「欠」というハンコを押すので、出席状況が目で見えてわかるようになり、「そろそろちゃんと出ないとだめだよ」などとコメントも書いています。学生の理解度が教員にとってもトータルでわかるという意味では、このカードは有効だったかなと思っています。

授業外学修時間が平均より若干上回っているのは、課題が具体的に出ている点にあるのかもしれません。ただ授業の進行がスムーズでない時があるので、1回単位で授業が完結しないこともあり、双方向の授業はいい面も

参考1 90年代以降の(高等)教育政策

平成3年 大学設置基準の大綱化

平成10年 21世紀の大学像と今後の改革方策について

平成17年 我が国の高等教育の将来像

平成20年 学士課程教育の構築に向けて

- ・我が国の大学が授与する学位としての学士が保証する能力の内容として、「知識・理解」「汎用的能力」「態度・志向性」及び「総合的な学習経験と創造的思考力」を掲げる。
- ・各大学において学修時間の実態を把握した上で、単位制度の実質化を求める。

平成24年 新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて

- ・答申内に「学修時間」という単語が複数回登場。
- ・「学士課程教育の現状と学修時間」という章立てがなされ、単位制度の基礎である学修時間に立脚した体系的・組織的な教育の実施を求めた。

平成26年 高大接続答申(高校・大学入試・大学の関係性)

平成28年 3つのポリシー策定と運用に関するガイドラインの提示

あるのですが、コントロールが難しいなとも思っています。なお演習(神道文化基礎演習)ですが、授業の工夫はそれぞれの教員に任されていますが、僕の授業では小テストの答え合わせをしません。採点はしますが、正答は教えずに、返却後、不正解の箇所については自分で正解を調べさせて、再提出させています。

中山：私も神道文化基礎演習を担当していますが、小テストは悪循環に陥っているクラスが多いと思うんです。そのように回収すると、2回目、3回目以降のテストで勉強嫌いの学生の点数も上がってきますか？



遠藤：短期では上がらないと思います。ですが試験や小テストにはいくつかの考え方、つまり評価する部分と勉強する機会という両方の考え方があると思いますが、テストをきっかけに勉強するという習慣も作って行かなければならない…。習慣がつくかどうかはまだわかりませんが。また課題の設定は「この範囲を学習しておいてね」といった言い方だと予習のできない学生がたくさんいます。だから具体的な形を提示することが大切です。ですが実際にそういう課題を設定するのは僕も出来ていなくて、労力も要ります。高等学校の先生は教材研究や課題の出し方も具体的ですが、一般に大学教員の文化には根づいていないことなので実践は難しく、自分も含めてすごく大変です(笑)。

戸村：このような形で共有させていただければと思います。次は人文系から社会科学系ということで、金子先生をお願いします。

金子：はい。手短かに3点ほど。遠藤先生のお話にもありましたが、やはりなかなか課題を勉強してもらえないというのがあるって、個人的には60分を必ず保てるように課題を出すようにしています。課題の出しっぱなしにならないように、次週にフィードバックしています。その場合、全員一人ひとりではできず数人しかできませんが、「こういう意見があった」というのを、なるべくその人の方を見て、目を合わせて確認しています。要は「課題を見てよ」と意識させないと、60分でもなかなか勉強してもらえないということです。



2点目は会計の授業は積み上げ式なので、同じ教員に2、3、4年生と習うケースが多く、学生が飽きちゃうんですね。ですので授業に対する姿勢、進め方・スピード、内容や話題、キャラも意図的に変えて飽きないようにしてもらっています。

3点目ですが最初はとにかく社会科学系は、7、8回目にどうしても飽きが…。なので8～10回目に大体ゲスト講師を読んで、学生の気分を心機一転させています。

戸村：飽きが来る原因は、内容が専門的で難しいからですか？

金子：モチベーションの問題があると思います。会計の専門職になりたい、という学生は経済学部の中でも減ってきているので、どうしても私の授業をとらなくては行けないという学生さんが少ないのです。正直、どの授業でもいいわけですよ。

中川：先生の基本的な授業スタイルを教えてくださいなのですが、まず課題を出されるわけですか？

金子：課題は2回に1回ぐらいです。これ以上(の頻度)



だと、ざっと見る感じになってしまい、最後の意見などを見られなくなってしまうので。課題は予習型の場合と復習型の場合とがあって、ミックスしています。授業の形式は内容にもよりますが、2年

生向けの財務会計や、2・3年生向けの公会計はレクチャー中心で、それ以降の演習はグループワークが中心になります。

戸村：会計だと復習のほうが重要だったりしますか？

金子：そうですね。復習のほうが重要で、逆に予習が難しい。予習は簡単なタイプの内容にして次の授業が少しは楽しくなるように、復習は授業よりもちょっと難しいレベルの課題にしています。

吉永：私は学生たちが自分たちで「予習や復習をしなきゃいけないんだ」と必要感を持つことが一番大事だと思っているのですが、先生の授業はその側面が出て来やすい授業なのかと思って、興味深かったです。

金子：ありがとうございます。難しい部分もあるのですが、ここ最近多いのですが、授業を受けたらすぐわかる！といったような…。会計はそうでもないかもしれませんが、経営とかマーケティング系の授業は、それを勉強すれば、学生が社会に出た際にすぐに役立つといったような過剰な期待を持ってしまって…。それと実際の授業との落差というんですかね。やはり会計とか経営系の授業というのは、1回目に期待値を上げすぎると難しいなと、今、先生の話のを伺って改めて思いました。

吉永：それは教育もあると思います。教員になりたい！と思って入学しても、最初に基礎的・理論的な内容がどっつと入ってくると、2年生の頃には学生の意欲が本当に下がっているのです。やはり学生の期待感との差というのが大きいのかなと思います。

戸村：なるほど。では吉永先生、くわしく願いできますか？

吉永：私は学部の専門科目だけでなく、教養総合の授業も担当していますので、このあたりを分類してお話したいと思います。まず教養総合ですが、こちらの授業では文学教材の分析をしています。学生たちの希望があれば、小学校に限らず、『舞姫』など中学や高校の教材も扱っています。



もともと興味を持っている学生さんも多いのですが、学習内容の動機づけは、結構難しいです。例えば法学部や経済学部の学生さんが文学教材を読んで、それが自分にとってどのような意味があるのか。学習の最初の部分で、「私達の生活にはたくさんのテキストがあって、今は文学教材としてこれらを使っているけれど、それを読む力は、例えばコミュニケーションの中で相手が言っ

いることと、意図していることを読むということにも役立つよね」などと確認しています。あとフィードバックがとても大切で、必ずこちらが目を通してよ、ということを感じられないと、絶対についてこないと思っています。コメントペーパーはどの授業でも必ず書いてもらい、名前をつけてフィードバックして、15回の授業を通して重複しないよう、なるべく多くの人を取り上げるようにしています。

専門科目の保育表現技術(言葉)では、幼児教育の中で用いられる紙芝居、絵本、パネルシアターなどの保育技術を扱っています。単純に技術としてではなく、どういう歴史的背景があるかとか、どのように用いるか、それは子どもたちにどのような教育的効果があるのかなどを考えさせることをメインにした授業です。さらにそれを教材として分析する力を身に付けさせたいと思っています(当日は学生が作成したノートを、学生の上で回覧)、予習と復習、分析を繰り返し、それを授業の中で学生に話し合わせ、さらに書き足していくことをしています。予習をしてこない授業に参加できないような課題の出し方をしています。

先ほど金子先生がおっしゃったように、予習の段階と授業とで段差がないと、学生は授業に興味を示さないと考えています。予習の段階では簡単に思っても、授業で実践してみたらそうでもない、友達から指摘を受けて、そういう気づきを全体の中でフィードバックした時に、自分が全然出来ていないことに気づくという、そういうギャップが必要なのかと。さらにそれを最後のところでもう一度立ち返させた上で、コメントペーパーに書いてもらい、私はその学生の気づきを分類して、フィードバックし、学生はフィードバックを活かして再

度、復習をしてくる…。こうして自分の成長を確認させるようなことをしています。

中山: このノートは成果物として、授業の最後に提出させるのですか？

吉永: 授業の最後に提出しますが、最初に「自分で学習の成果をまとめていくんだよ、最後になってばたばたとまとめないようにね」と、指導しています。ポートフォリオ評価にもなります。評価では自分が授業で重要と言っていること、つまり授業内容と評価方法が食い違うというのが一番学生にとっては不満だと思うので、授業へのコミットメント、関心・意欲、授業で学んだことを自分で振り返る力を評価すると私は伝えています。これ(ノート)が学生の学修の蓄積として、学びの履歴がはっきりみえる学生には、高い評価を与えることにしています。

戸村: 吉永先生、ありがとうございました。それでは井上先生、お願いします。

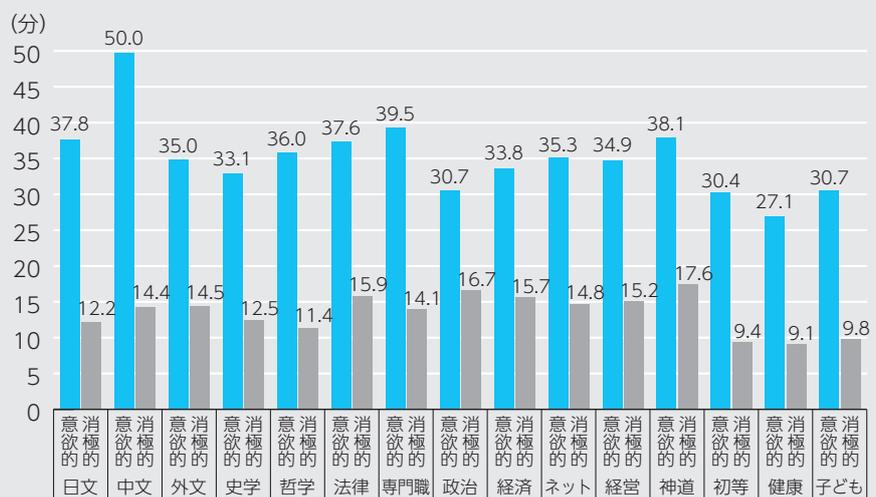
井上: はい。吉永先生と大分被るところがあるかと思いますが、文学部は五学科ありますので、日本文学科の一教員の話として申し上げたいと思います。演習は限られていますので、日本文学概説Ⅰと日本文学講読Ⅰのほうでお話をさせていただければと思います。



根本的に、僕はここ数年で特に感じているのは、日本文学を勉強したいという学生の動機の一つに、「身を隠したい」という感覚がどうしてもあって、社会性を身につける事自体を良しとしていることを、すごくプレッシャーに感じている人が結構いるんですね。本を読

参考2 平成27年度後期学生による授業評価アンケートの結果から ～予習・復習の意識と授業外学修時間～

右のグラフは「Q10. あなたは予習・復習をするなど、この授業に意欲的に取り組みましたか」について、「4. かなりそう思う」「3. そう思う」を意欲的、「2. あまりそう思わない」「1. 思わない」を消極的として、授業1回あたりの授業外学修時間の平均を、アンケートに回答した学生の所属学科で区分して集計・図示したものです。これによると学部学科によってばらつきが見られますが、意欲的な学生と消極的な学生とは、最大で35.6分、最小でも14分の授業外学修時間の差があるようです。



むことは一人で行うことなので、共同作業をしたくない、高校までで無理やりアクティブラーニングや話し合いなどをさせられ、やっと大学に入って一人になれると思ったら、また共同作業か…と。こうして嫌になっているところはもう少し明確に見てあげて良いのでは、と僕は考えています。そうすると「君は君で良いんだよ」ということになりませんが、しかしそれは、放置することでもあるので、その点は注意しています。

日本文学概説Ⅰは初年次教育で8クラスあり、1クラスの学生数は35~38名の担任制で、2週間に1回、担当者（連絡）会議を必ず実施しています。欠席が多い学生、2回連続で欠席した学生については、その理由を教員間で共有して、伝承文学概説や日本語学概説の先生方にもお伝えし、その学生を注視してもらって、なるべく出席を促すということがあります。

初年次教育ですから、とにかくいろいろなジャンルにアクセスする数というか、いろいろなことを考え、いろいろな接続点を持つてということ、そこに主眼を置いています。担当教員は上代から近現代文学まで多様なジャンルですので、どういう研究方法があるのか、各教員の専門性を活かして、前期と後期とで担当クラスを移動しています。その最大の目的は、2年次からの専攻コースで何に取り組みたいか、どういう問題（関心）を自分が持っていきたいのかという、つまりその動機づけ自体を探してほしいという授業を行っていきます。

今回教員で共有して行ったものの1つに、学生に例えば「國學院大學について書きなさい」というテーマで書かせて、それを別の学生に渡してだめな点を指摘してもらい、指摘した学生は必ずそこに署名して、責任を持たせる、それを3人以上に必ず見させる、ということさせました。そしてそれを本人に返して、書き直させ、その両方を僕が受け取って、翌週までに見て返す。まだここがだめだから、あなたは継続的にこの課題を抱え込んでいると指摘する。コミュニケーション不足というのはアンケートでも言われていたことなので、なるべく関わ

り合いをもって、君の言葉は何なのかということも考えさせるように、概説の授業ではしています。後期はそれをグループワークで始めていく形式にしています。ある学生が書いたものを他の学生に読ませて、ここが足りないという点を指摘させたのは、すごく良かったという反応がたくさんありました。

引き続き、僕は一応、（日本文学概説と）連動させているつもりですが、日本文学講読はテキストの構造の分析の授業になります。毎時間、事前にある小説を読ませて、私はこの小説をこのように読むということを、A4サイズ400字詰原稿用紙を必ず一枚提出させていて、それで出席としています。今年の実員は80名でしたが、提出された原稿用紙はすべて毎週コメントをつけ、今回の傾向はこういう読みをする学生が多いところを把握して、それを内容に盛り込んで構造分析を行います。構造の分析、論理的にどう読むかということをししないと、文学は面白いのか、つまらないかだけになってしまいますので、目の前にある活字だけで勝負をする。先生の知識があるから読める読めないとかではなくて、目の前の表現をどう分析していくかということを経験ずっと行います。

概説Ⅰは主体的に問題を選んでもらえるようにということを、概説Ⅱはこちらがどれだけ物語を解釈していくかということ、いつも見せるということをしています。

またデジタル・アクティブラーニングということで、概説では学生に書かせた文章をみんなで共有できないかと考えていて、打ち込みの入力ではなく、縦書きで書き込ませ、その言葉を瞬時にOCR機能で反映させる…などというのを考えたのですが、なかなか難しいようで…。ただ機器を使いこなせること自体だけを考えていたのでは次がないかなと思うので、この授業は〇〇先生の授業とかなりリンクしていますよ、というようなことが出てくれば、学生も〇〇先生の授業も履修してみようかなと、学部の枠を超えられるのではないかと考えています。

戸村：僕も公開添削をしています、多くの学生が公開されることに抵抗感が無いんですね。苦手な学生は前

向きに、得意な学生はより高みに、という感じですね。さきほどもありましたが、見られている感というか、当事者意識が授業に出てくると、それなりに主体的に取り組むようになるのではないかと思います。

電子教材についても取り組ま



ねばと思い、機構の先生方のご協力の下、反転授業のための動画をYouTubeにアップしています（下写真）。最初、15分の動画をアップしたのですが、学生や妻から「長い」と指摘されたので、5～6分に変更しました（笑）。それでも3割程度は視聴してこないんですね。それで結局復習をする。すると真面目に視聴してきた学生は、授業で復習するなら、見てこなくていいじゃないかと悪循環になってしまう…。後期は対策を練らなきゃいけないと思っています。井上先生のご指摘どおり、機構では今後、電子教材の開発にも取り組んでいかなければと思っています。では最後に中川先生、お願いします。

中川：私の場合は法律専攻の裁判法A、刑事訴訟法、法律学特殊講義刑事訴訟法2というのがあって、この3つが初級・中級・上級とつながっています。本日は中級の刑事訴訟法を具体例とします。



基本コンセプトですが、学力の3要素を全方向的に伸ばすスタンスで、その関係から全授業を協働学習システムにしています。グループワークがない授業はありません。初級は入門科目として法学に対する意欲がない学生からなんとか意欲を引き出して、ドロップアウト・落ちこぼれ防止を、中級は初級を経て意欲が出てきた学生に、頑張っただけで勉強する授業がないと浮きこぼれになってしまうので、浮きこぼれ防止のために鍛えてあげようというもの、上級はそれでも満足できない学生を対象に、法律家を目指すレベルまで鍛えてさしあげようといったコンセプトです。

学修の流れは、最初の講義では私が知識を提供します。そしてその知識を使って解く課題を提供します。その課題を個人で自習した後、チームで集まって検討し、再検討を経て提出します。グループワークは専ら授業の外で行います。教員のフィードバックは即時に行い、その後、振り返りをする。このサイクルを繰り返し、時折、中間テストを行って、最後に大振り返りをして終わり、という流れです。このサイクルは初級で10回（2単位）、中級で20回（4単位）、上級で13回（2単位）となっていて、私の授業を全部履修すると、8単位43回グループワークを繰り返すことになります。

中級を例に課題の詳細です



が、前提としてまず履修する学生の質です。学力の問題（初級知識が定着しているか）の他、課題に耐えられる力や、遅刻をしない、粘り強いといった要素を、診断テストで事前に把握します。診断テストで所定の点数を取れない学生には、履修の拒否はしませんが、決意表明文を書かせた上で履修を認めています。また履修者には履修の動機と抱負を、人前で1分間スピーチできるような文面を家で考えて来てとあって、書かせ提出させます。匿名にして授業で全員配布することで、「みんなで頑張ろう」という空気を初回授業で作ります。個人単位で課題を出してもこなしてこないのは、経験上、分かるわけです。それは学力的な能力よりも、やる気が起きなかったり、他のことを優先してしまったりしてしまうからで、学生の現状を見極めた上で、自分一人では出来ないけれども、仲間や教員の支えによってできると、そういうギリギリのところのレベルを設定しています。なので学修時間のミニマムスタンダードを決めたくて課題づくりをしていて、初級は90分、中級は180分、上級は240分以上で、これはうまくいっています。

知識・技能、思考力、協働性をどう盛り込むかという、（知識は）私が授業でしゃべった基本部分を全部疑問文で尋ねます。またレクチャーだけでは、司法試験の対象科目としては不十分なので、条文を見れば分かる知識補充問題も出しています。そして人によって異なる見解について、自分はどうか考えるかということ論述させる課題を出しており、これで問題解決能力と表現力を鍛えています。これらの課題にまず個人で取り組むわけですが、それをそのまま提出させるのではなく、グループワークで鍛え合います。アクティブラーニングの手法でPeer Editingといった手法を真似ているわけです。メンバーの手が入って、チームで揉まれた答案をチームで1通出すわけで、それを私がフィードバックするスタイルになっています。チームで揉まれているので、むちゃくちゃな答案が皆無になって、私が手を入れる余地がいくらいです。どのチームも合っているところはいい

ち確認しなくて良いので時間短縮となり、コメントする上でも好都合です。

アクティブラーニングにはフリーライダーの問題が付きものですが、事前の診断テストがかなりの規制になっています。あとはサンクション。課題未提出が半期3回でチーム除名、Aを取るまで課題は再提出、再提出が半期3回に達すると、チームを強制解散。またチームごとに活動記録を毎週提出させていて、それを参考にフリーライダーをあぶり出し、注意しても改善されない場合はチームから除名させます。半期に遅刻や欠席が5回を超えた場合、また計4回の間中テストもA以上を取るまでは再提出させ、再提出がないものはアウトとなります。このような状況に設定しておりますと、フリーライダーは皆無になります。アメは各自の実力向上です。

通年科目ですと途中でだれないように、個人単位で学習過程を振り返っています。これはチーム日誌担当者からコメントを書いてもらうもので、自分がどういうふうに行動してきたか、どう人に見られているかというのを意識させ、メタ認知してもらっているわけです。同じことをチーム単位でも実施しています。

学問上、重要なのが、大振り返りです。これまで論述課題などで出てきたそれぞれの論点について、自分はどうか考えるかということ、なぜそう考えるかということのを最終段階でもう一回まとめて書いてもらいます。毎回個別に与えられた課題の時点では、一番妥当だと考えていても、全論点を振り返ると自分は矛盾していないだろうか、一貫性に欠けるのではないかと、振り返る契機してもらおうですね。その上で刑事訴訟法に対して、自分はどうか現状を評価し、どうあるべきと考えるように至ったか、勉強する前と比較して刑事訴訟法に対する見方は変わったか、あるいは深まったかということを書いてもらっています。

こんなシステムにした結果は、僕は、すごく良いと思っています。当初は私も慣れていなくて大した成果は上がらなかったんですが、2012年度頃からは、出席率93.7%、合格率(単位修得率)が93.9%となっています。順調に回っているので悩みはないです。強いて言えば、修得すべき知識の量が多いことです。多様な学びのスタイルを取ってみたいと思うのですが、司法試験がある以上、テキストと短答問題をひたすらこなさなければならぬ。今の希望は、司法試験科目でない科目を担当したいということですかね。

戸村：中川先生、ありがとうございます。時間の関係



上、多様な議論を交わすことが難しいのですが、機構では引き続き学修時間等のデータ整理、情報発信に努めていきたいと思っています。こうした点を含め、何かご意見を頂戴できると嬉しいのですが…。

遠藤：学修時間の計測の際に、学生は読書時間などをカウントしていないと思うんです。人文学などは本を読んでいる時間と、授業準備の時間とが曖昧な領域なので、目安としては現状が良いのですが、細かい点で学修時間の計測が成立しているのかな、というのはあります。あとは時間外学修の基本は、課題を具体的にどういう形で出しているのかによると思うので、ある程度大勢の先生に課題の出し方を寄せていただいて、質的な面を把握することも大事な、と。

中川：授業の充実には、事前準備が不可欠で、わかりやすく話すだけでなく、どういう準備をさせるかというデザイン(インストラクショナル・デザイン)が重要で、学修時間だけ独り歩きしても駄目なんですね。僕が困っているのは、他の授業全てがアクティブラーニング型に転換した際に、僕の授業が成立しなくなることです(笑)。やたらめったら課題が出され、そんなに集まっている暇はない、他の授業が忙しいとか。だから知識習得を前提に置くなど、グループワークにしなくてもいい授業を確実に残すなど、うまく配慮したカリキュラムデザインが求められますね。

吉永：人間開発学部の学修時間が少ないのは、実習やインターンシップが多く、免許取得のために履修科目数が多いというのもあると思います。ただ今日の座談会を通じて、講義形式だけれどもいかにアクティブにさせるか、事前の課題をいかに的確に与えるか、そういった点はとても示唆的だと思いました。

戸村：このまま議論を継続したいのですが、本当にもう時間切れです。機構ではこれからも本学の授業改善に取り組んでいきたいと思っています。本日はどうもありがとうございました。

大学授業最前線

— 教員の努力！ 学生のまなざし！（15） —



問題探究型授業を通じた、ディープ・ラーニングの試み

「大学授業最前線」は、國學院大學で工夫を凝らした授業を行っている先生方にその努力と工夫について語っていただくコーナーです。

シリーズ第15回目は、文学部哲学科の小手川正二郎先生に、全学部学科の学生を受講対象とした教養科目でもある「応用倫理学」を中心に、ご担当されている哲学・倫理学の授業についてインタビュー形式で語っていただきます。また、その授業の受講学生の声もあわせて掲載し、授業の様子をレポートいたします。



教員の授業努力

小手川正二郎
(文学部哲学科准教授)

—いわゆるリベラルアーツという教養教育の原型は、古代ギリシア・ローマ時代にまで遡ることができます。そして、哲学という学問はそのリベラルアーツ、すなわち自由七科の上にそれらを統合するものとして位置づけられてきた歴史と伝統があり、今もなお教養教育の核をなすものでありつづけているといえるでしょう。学びの基礎は、読むこと、書くこと、話し合うことにあり、そ

れらの営みを通じて学びを深めることで、自由のための技芸を獲得できるとされてきました。

昨今いたるところで耳にする「アクティブ・ラーニング」はあくまでもそうした自由を獲得するための技芸のひとつであり、その目的は「ディープ・ラーニング」にあるといわれています。そうしたFDをとりまく現状のなかで、教養教育としての哲学・倫理学には何ができるのか、ご意見をお聞かせください。

哲学的に考えることは、自分の意見の前提となる考えを明らかにして自分がこれまでどういう考え方や価値観に基づいて判断したり生きてきたりしたのかを自覚するということです。ですので、受講生が自分自身の問題として意識できるような事柄をとりあげ、何気ない違和感や日々積み重ねている判断に注意を向けなおしてそれを自分自身であらためて考え直すきっかけにして欲しいと

いう思いがあります。

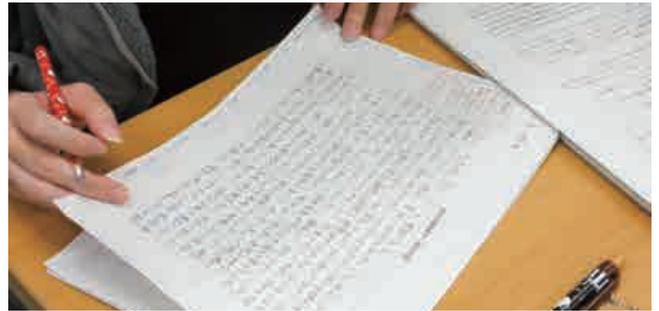
——哲学の授業という、哲学史に沿って歴代の著名な大哲学者の思想を学ぶものをイメージする人が多いと思います。しかし、小手川先生のシラバスを拝見すると、具体的な問題や時事問題も積極的にとり入れておられますね。授業をする上で大事にされていることはどのようなことですか？

授業では何よりもまず、学生に自分の頭で考えてもらうことを大切にしています。自身の専門は、哲学・倫理学ですが、授業では様々な学部学科の学生たちが、自身の経験に立ち戻りつつ、自分とは異なる観点からの意見に触れて、自身の価値観を問い直してもらえるような環境づくりを目指しています。様々な立場からの意見に耳を傾けることで、自分の思考の前提を問い直す体験こそが哲学の一番の魅力だと思うからです。

——哲学は「役に立たない」といわれがちで、資格等の社会に出てすぐに役に立つようないわゆる教養教育のなかでそれほど重要視されていないのが現状ではないかと思うのですが、その点についてはどのように考えておられますか？

「役に立つ」とはそもそもどういうことなのかと、まずそこから考えたいのですが。「応用倫理学」で扱っている性差別や性的マイノリティの問題、新型出生前診断や難民問題において現実に関わっていることは、社会に出てからは誰も教えてくれませんし、そこから学んでも遅い。その上、大学に来るまでもそうしたことを学ばずに来る人がほとんどであるというのが現状です。例えばセクシュアル・ハラスメントなどについても、いつ加害者になったり犠牲者になったりするかわからないわけで。現実的なリスクを知っておくためにというのはもちろんのこと、そうした事柄にひそむ本質的な問題を直視するためにも大学でこそ、そこはしっかりと学ぶべきではないかと。実際、とりわけ就職活動や社会人生活で性差別にぶち当たる女子学生は多数いるのに、差別を差別として認識できなかったり、差別に対する対抗策を知らずに泣き寝入りしたりする人は少なくないと聞きます。自分に起きていることがいかなることを自分の頭で考え、自分で判断するための最も有効なアプローチのひとつが哲学であると考えています。これ以上「役に立つ」学問はあるでしょうか。

——なるほど。着任された頃に書かれた、「教員随筆」(文



▲論述練習をしてもらい、それを共通の評価基準を手がかりに学生同士で相互採点しています。

学部のホームページに掲載)でもそのことの重要性についてご自身の経験も交えて書かれておられますよね。歴史ある哲学という学問も、現代社会における諸問題と突き合わせることで〈いまここ〉にある切実な問題を考える上で有益であるということですね。

では、こうしたねらいのもと授業をなさる際には具体的にどのような工夫をされていますか？

まず授業の組み立てですが、「応用倫理学」の授業ではひとつのトピックにつき三回の授業を行い、各トピックの三回目に学んだことや自分の考えを授業内に論述してもらい、そして共通の評価基準に基づいて学生同士で相互採点してその成果を共有するというかたちをとっています。そうして、書くという作業を通して学んだことを言語化し、より理解を深めてもらうよう工夫しています。それに加えて、適宜グループディスカッションを取り入れたり、授業時に書いてもらったコメントを次回授業のレジュメで紹介したりするなどして、学生間の意見交換の機会をなるべく設けるようにしています。

また、ひとつのトピックごとに問いを立てて学生に提示し、それに対する代表的ないくつかの立場の議論を紹介し、問いにたいする答えはひとつではないこと、どの立場にもそれなりの理由があることを紹介しています。それらの意見を踏まえううえで、学生が自分の頭で考えて、論理的な理由に基づいた意見を持てるような授業づくりを心がけています。

——それは、学生がより深い学びを実現するための方法のひとつとされるPBL(問題解決型学習)と似た組み立て方と似ていますね。

着任してから、学内のFD研修会等には積極的に参加するようにしています。また、そこで紹介された文献等も参考にしつつ、教育方法についても学んで授業の仕方を工夫しています。

また、学内研修だけではなく、他大学の哲学系授業の担当教員とも、研究会や学会を通じて授業の工夫の仕方、教材の選び方や授業の構成について積極的に意見交換をするように務めています。例えば、日本哲学会では、隔年開催で哲学教育に関するワークショップを開催し各自が授業での工夫について議論する機会が設けられています。哲学分野から『学生を思考にいざなうレポート課題』（成瀬尚志編、ひつじ書房、2016年）という良書も出版されました。

その他に、哲学といっても幅広く自分自身の専門と遠い分野もありますし、現実の問題をとりあげる際には現場の生の声を聞くことで学びが深まることもあります。そのため、毎年ゲスト講師を招聘して授業をしてもらい、学生の学びがより深まるように工夫しています。

—なるほど、本当にいろんな工夫をされているんですね。では、最後に今後の展望や課題についてご意見をお聞かせください。

やはり、授業全体の構成でしょうか。学生により深く考えるためのスキルを身につけてもらいたいと思うと、とりあげるトピックを減らして議論したり考えたりする時間をとる必要があります。しかし、多くのトピックについて学んでもらおうとすると、論述や相互批評に割く時間が少なくなる。家でレポートを書いてきてもらえば自宅学修時間も増えますし、よいのでしょうか。学生は、アルバイトで忙しかったり、他の授業のレポート課題と重なったりして負担が増えすぎることを考えると難しいところですね。こうした点についても、学内の他の先生と意見交換をする機会がもっとあるとよいなと思っています。

—機構としても、先生方の様々な取り組みを支援して行きたいと思います。今回はありがとうございました。



▲論述練習の高得点者には前に出てその内容を発表してもらい、ディスカッションをしています。

受講学生の声

藤澤波璃彩さん（文学部 哲学科）

性差別や報道、戦争、難民、死刑など、違和感をおぼえ胸に自分なりの意見を抱えつつも素通りしていた問題と改めて向き合い、自分が社会の一員であることを強く実感する授業でした。あらゆる問題について講義で倫理的な観点から学ぶだけでなく、ディスカッションで自分と正反対の意見を持つ人とも考えを共有することにより、自らの論を深めたり、思いがけない新たな解決策が生まれることがこの授業の醍醐味であったと感じています。特に印象的だったのはフェミニズムについてです。自由だと感じていた自らの女という性は見えざる束縛を受けていたことに気づかされました。月経の苦しみをひた隠しにする私は私自身を差別へと投げ入れていたのかも知れません。

岩井鮎美さん（法学部 法律学科）

この授業を受講して良かったと思うことは、さまざまな問題について自分なりに「正しいことはなにか」と考えられたことです。あるトピックについて、先生やゲスト講師の方、そして同じ受講生の方の意見を聞くことにより、自分の考えを持てるようになったと感じています。そして、自分とは違う意見を正しく理解し、反論したり、ときには納得したりすることの大切さを学ぶことができました。

浅見航大さん（法学部 法律学科）

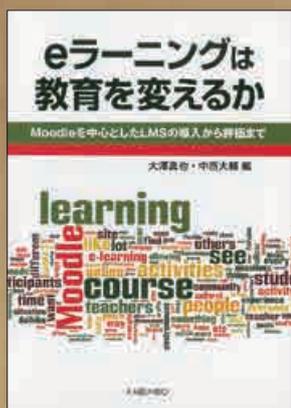
常日頃、私はインターネット上における批判のあり方について疑問を感じていました。感情をむき出しにして、何ら検証なしに批判する姿を見ていて胸が苦しくなる時があります。この授業では、そのような批判のあり方を完全に否定し、物事の批判の仕方や昨今議論が熱く行われている議題に対してどのような批判が加えられるかを学ぶことができるので、この授業は非常に有意義だと思いました。授業内で取り扱われた男女平等の議論や報道倫理の議論では、私が感じていた疑問や批判が多く取り扱われてようやく議論の全体像が見えてきて、議論に交わることができるようになりました。

名著探訪

— 高等教育、この1冊 — (第7回)

本機構の教員が、自身の日々の教育活動や高等教育研究を進める上で役に立ったもの、これは読んでおいた方がいいと思うものなど、その琴線に触れた1冊を紹介するコーナーです。

● eラーニング導入手引書の決定版



大澤真也・中西大輔編『eラーニングは教育を変えるか：Moodleを中心としたLMSの導入から評価まで』
広島修道大学学術選書 64、海文堂、2015年

高等教育におけるeラーニングの導入の必要性が叫ばれてからしばらく経つ。そもそも、eラーニングとは、字義通り電子的なものを利用した学習全般のことを指し、具体的には、ウェブを利用した技術全般を用いたICT教育ツール、オンライン学習やCBT(Computer-Based Training)、WBT(Web-Based Training)のことをいう。そしてそれらのツールは、初年次教育やリメディアル教育、そして自宅学習のためのコンテンツとしての導入が進んでいる。しかしながら、本書の調査によれば多くの大学が現在試験的に導入しており、その活用についても前向きに検討しようとしているにもかかわらずその活用が進んでいない。その理由に、主として以下のものが挙げられる。第一に、予算の不足による学内インフラの整備が十分でないこと。第二に教員の関心が薄く、その導入のノウハウも不足していることである。

たしかに、eラーニングを導入するために、各大学が為すべきはまずは環境の整備である。学生の一人当たりの仕送り額の低下等の経済状況に鑑みつつ、各自がどれだけeラーニングコンテンツを活用できる機器とネットワークを保有しているか調査する必要がある。そのためには、IRを通じて学生のIT学習環境状況を的確に把握することがまずもって必要であろう。本書はこうした環境整備の重要性を裏付けるデータを集積するための調査方法の一例として大変参考になるものである。

また本書は、その導入のノウハウについても現時点での決定版といえるような内容となっている。これまで国内で出されたどのeラーニング関連書籍よりも多くのコンテンツやそのシステムの特長について網羅的に示されている。そのため、各大学によって異なる学生の実態を踏まえ、よりふさわしいツールを取捨選択していくうえで非常に有益なものである。これまでeラーニング導入に関するノウハウについては、主として授業内での活用方法に焦点が当てられ、実践研究が積み重ねられてきた。そうした研究は確かに有益であるが、大学におけるシステムの運用それ自体を可能にするためのシステム整備のノウハウについては片手落ちであったと言わざるを得ない、そうした点の手引き書として本書は画期的なものであり、今現在最も読まれるべき書であると思われる。(佐藤)

新刊紹介

本書は、単なるアクティブラーニング(以下ALと略記)の導入に留まらず、豊富な実践例を参照しつつそのカリキュラムマネジメントのあり方までを視野にいれて著されたものである。400頁近くにおよぶ大部のもので、四部構成をとる。

第一部ではALの調査報告の概要が、第二部ではFDセミナーにおける先進的な大学の取り組みについて紹介されており、事例三として本学法学部法律学科の実践例が紹介されている。第三部では組織改革のあり方について、第四部では実地調査による大学・学部・学科別の詳細なレポートが掲載されている。

大学ごとの多様な実践のみならず、近年の大学教育改革の流れを踏まえた理論的考察もあり、その上で今後のあり方についての提案がある。すなわち、授業内のAL化それ自体はあくまでも学生にとってのより深い学びを実現するためのツールであり、そうした学びをさらに発展させていくためにはカリキュラムマネジメントを通じてより体系的な学びのシステムを構築する必要があると。昨今の高等教育の動向や諸大学の実践を概観するにふさわしい本となっており、是非とも一読されることをお勧めする。(佐藤)



河合塾編著『大学のアクティブラーニング：導入からカリキュラムマネジメントへ』東信堂、2016年

教育開発推進機構彙報

(平成28年7月1日～12月31日)

※肩書きは等は当時のもの

行事

11月16日：平成28年度FD講演会（渋谷キャンパス）
題目：「反転授業を組み合わせたアクティブ・ラーニングの取り組み」
講師：森澤正之氏（山梨大学教育国際化推進機構大学教育センター教授）

○学生オリエンテーション・講習会・試験実施等

7月6日：HSK 4級一コマ講習会
7月9日：学内TOEIC[®]試験（第2回）
7月13日：新方式TOEIC説明・問題体験会
7月25・28日：NetAcademy2活用ワークショップ
8月5日：心游舎「御花神饌ワークショップ」開催
8月9日：心游舎「新潟コメ作りワークショップ（草取り）」
9月20日：学内TOEIC[®]試験（第3回）
9月23日：心游舎「新潟コメ作りワークショップ（稲刈り）」
事前説明会
10月1日・2日：心游舎「新潟コメ作りワークショップ（稲刈り）」開催
10月14日～12月8日：やさしい英語ディスカッション（計5回）
10月17・19日、11月28・30日：TOEICハーフ模試
10月29日：学内TOEIC[®]試験（第4回）
10月～12月：シンプル英会話（計28回）
10月19日～12月21日：TOEIC対策（計7回）
11月9日・10日：第1回「渋谷で体験ボランティア」開催、
於日本赤十字社総合福祉センター
11月14日：初めてのTOEIC
11月16・22日、12月15・19日：ムービーアワー（計4回）
11月16日、12月14・19日：TOEIC演習
12月3日：学内TOEIC[®]試験（第5回）
12月13・14日：第1回学修支援講座「ダメレポートから脱出しよう！」
12月14日：中国語検定3級講習会
12月21日：TOEIC新方式紹介・問題体験会

学生スタッフ研修会・打ち合わせ会等

7月23日：平成28年度前期ノートテイク報告会
7月29日：平成28年度前期SA最終報告会
9月24日：平成28年度後期SA応募者説明会
9月24日：平成28年度後期ノートテイク説明会
10月14日：たまプラーザキャンパスノートテイク研修会（鈴木崇）
10月15日：ホームカミングデー（SA・ノートテイク催事あり）
11月9・19・30日、12月17日：パソコンノートテイク研修会
11月19日：平成28年度後期SA中間報告会
11月19日：平成28年度後期ノートテイク報告・研修会
12月5日：たまプラーザキャンパスノートテイク研修会（鈴木崇）

FD活動、教育支援

7月30日：平成28年度第2回新任教員研修・第1回FDワークショップ（渋谷キャンパス）
①題目：「國學院大學校史」
講師：大東敬明氏（研究開発推進機構准教授）
②題目：「マイクロティーチング」ワークショップ
講師：中山 郁（教育開発推進機構准教授）
9月16日：「國學院大学における理想の授業とは」5学部教員による授業改善のための座談会（中山・小濱・戸村・仙北谷）
12月10日：平成28年度第3回新任教員研修・第2回FDワークショップ（渋谷キャンパス）
①題目：「シラバスと授業の到達目標の書き方」
講師：小濱 歩（教育開発推進機構准教授）
②題目：「アクティブラーニングとジグソー法」
講師：戸村 理（教育開発推進機構助教）

出張等

- 7月4日：FLIT第5回公開研究会参加、於東京大学本郷キャンパス（中山・戸村・大津・鈴木道）
- 7月22日：障害のある学生の学修支援に関する検討会（平成28年度）傍聴、文部科学省開催、於一橋大学一橋講堂（佐藤）
- 8月5日：2016年度TOEIC[®]セミナー、於ベルサール半蔵門（松岡）
- 9月8・9日：日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム参加、於筑波技術大学久保キャンパス・ノバホール／つくばイノベーションプラザ（佐藤）
- 9月9日：STLHE×TEIKYO Collaboration Projectワークショップ及び国際シンポジウムに参加、於帝京大学八王子キャンパス（松岡）
- 9月10・11日：初年次教育学会第9回大会参加、於四国大学（大津・鈴木道）
- 9月15日：國學院大學北海道短期大学部FD研修会出講（中山）
- 9月15日：私立大学庶務課長会9月例会IR講演出席（小濱・戸村）
- 9月17日：日本言語テスト学会20周年記念全国研究大会出席、於東海大学湘南キャンパス（小館）
- 10月16日：全国大学国語教育学会参加、於白百合女子大学（大津・鈴木道）
- 10月17日～12月19日：帝京大学高等教育開発センター「平成28年度教育力向上研修」参加（中山）
- 10月29日：関東圏FD連絡会ワークショップ参加、於法政大学（小濱）
- 11月5日：大学英語教育学会 第4回 英語教育セミナー：授

業学を生かす英語教育イノベーションI参加、於青山学院大学（小館）

- 11月6日：日本文学協会第71回大会参加、於二松学舎大学（大津・鈴木道）
- 11月27日：東京大学「初年次ゼミナール」の挑戦II：アクティブラーニングの実践例を中心に 参加、於東京大学駒場キャンパス（戸村・大津）
- 12月3・4日：大学教育学会2016年度課題研究集会参加、於千葉大学西千葉キャンパス（戸村）
- 12月8日：平成28年度大学院教育研究会参加、総合研究大学院大学主催、於一橋講堂（中山・戸村）
- 12月10日：JASAL2016 Annual Conference（日本自律学習学会2016年年次大会）発表、於甲南女子大学（小館）
- 12月17日：日本学会議主催公開シンポジウム「3つのポリシー策定と分野別の参照基準」参加、於早稲田大学（中山・戸村）

情報発信

- ・高等教育TOPICS配信（毎週月・木）
- ・教育開発推進機構ウェブサイトよりセミナー等情報発信（随時）

刊行物（予定）

- 2月：『教育開発ニュース』Vol.15
- 2月：『教育開発推進機構紀要』第8号
- 2月：平成27年度『授業評価アンケート分析報告書』（Web公開）

そつ たく どう じ 啖 啖 同時

— 編集後記 —

今号では、平成28年度後期から、教職センターが教育開発推進機構の一センターとなったことを受けて、巻頭でセンター長挨拶ならびに業務の紹介を行っています。また、学修支援センターの活動を紹介した記事は、学修支援講座の開講に加えて、障がい学生の学修支援や、ボランティアステーションの活動など、その取り組みの多様さを窺わせるものとなりました。

今回の目玉となる特集記事は、本学における「理想」の授業のあり方をテーマに、各学部の先生方をお招きして開催した座談会です。学部・授業の特質を踏まえて、学生の意欲と努力を引き出すための具体的な取り組みが様々なアプローチで展開されており、先生方の熱気も伝わってくる、大変興味深い内容となっています。

また、シリーズ企画「大学授業最前線」は、文学部哲学科の小手川正二郎先生の授業を取り上げました。学生に「自ら思索する態度」を身につけてもらうことの大切さは、そのためにどのような授業実践が可能かという問いと併せて、他の分野の先生方にとっても等しく共有されるテーマだろうと思います。（小濱）